千葉市辺田遺跡 ―平成19年度―

2008

株式会社 細田工務店・財団法人 千葉市教育振興財団

# 千 葉 市 辺 田 遺 跡

## ― 平成 19 年度 ―

2 0 0 8

株 式 会 社　細 田 工 務 店
財団法人　千葉市教育振興財団

# 千葉市辺田遺跡

— 平成19年度 —

2008

48018千葉市辺田遺跡H19.indd 1 08.4.1 10:24:21 AM

遺跡遠景航空写真（東から）

調査終了時航空写真

巻頭カラー２

１号方形周溝墓完掘状況

２号方形周溝墓完掘状況

48018千葉市辺田遺跡H19.indd 3 08.4.1 10:24:26 AM

# 例言

1．本書は、千葉市中央区に所在する辺田遺跡の発掘調査報告書である。

2．辺田遺跡の発掘調査は宅地造成に伴うもので、財団法人千葉市教育振興財団が株式会社細田工務店より委託を受けて実施した。

3．本書に所収した遺跡の所在地・調査期間・面積・担当者は次の通りである。

辺田遺跡

①　所 在 地　中央区都町 1134-3 の一部

②　調査期間　平成 19 年 11 月 1 日～平成 19 年 11 月 30 日

③　調査面積　上層　570㎡（本調査）

④　担 当 者　古谷　渉

4．整理作業及び本書の作成は、平成 20 年 1 月 7 日～ 1 月 31 日に行い、古谷　渉が担当した。

5．遺構の写真は発掘調査担当者が撮影した。遺物は青柳すみ江の協力を得て古谷が撮影した。

6．遺構の記載は長原　亘、遺物の記載は菊池健一の協力と助言を得た。

7．出土遺物及び調査記録は、すべて千葉市埋蔵文化財調査センターに収蔵保管している。

8．発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい。（順不同・敬称略）

千葉県教育庁生涯学習部文化財課、千葉市教育委員会生涯学習部生涯学習振興課、株式会社細田工務店、石川日出志、宅間清公、深谷　昇、渡辺修一

# 凡例

1．本書に掲載した遺構図等の方位は、公共座標の北を基準としている。

2．土層及び遺物の色を記号で示してある場合は、農林水産省監修「新版　標準土色帖」による。

3．本文中の挿図の縮尺は原則として以下のとおりであるが、各図中に縮尺を示してある。

遺構実測図の縮尺は、竪穴住居跡：1/60　土坑：1/40　埋設土器：1/10

方形周溝墓：1/80　方形周溝墓主体部：1/30　である。

遺物実測図の縮尺は、土器復元：1/4　土器拓影：1/3　石器：4/5である。

4．第１図は国土地理院発行の２万５千分の１地形図より作成したものである。

5．第２図は陸軍参謀本部作成の第１軍管地方二万分一迅速測図原図より作成したものである。

6．調査区から出土した遺物はグリッド番号を図版に記載し、方形周溝墓から出土した遺物は「２号方形周溝墓西側周溝」＝「２周西」、「２号方形周溝墓主体部№５」＝「２周主・５」といった例にしたがい図版に記載してある。

48018千葉市辺田遺跡H19.indd　4　　08.4.1　10:24:31 AM

# 本文目次

巻頭カラー
例言・凡例
目次
第１章　調査に至る経緯と遺跡の位置及び周辺遺跡 …… 1
第２章　検出された遺構と遺物 …… 5
第３章　まとめ …… 20
写真図版
抄録

# 挿図目次

第１図　辺田遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第２図　辺田遺跡の位置と周辺の遺跡（迅速図）…… 2
第３図　辺田遺跡位置図 …… 3
第４図　辺田遺跡遺構配置図 …… 4
第５図　１・２号住居跡実測図 …… 6
第６図　３号住居跡実測図 …… 7
第７図　４・５号土坑、１・２号埋設土器実測図 …… 8
第８図　住居跡、土坑、埋設土器出土遺物実測図 …… 9
第９図　調査区出土遺物実測図 …… 10
第 10 図　１号方形周溝墓実測図 …… 13
第 11 図　２号方形周溝墓実測図 …… 14
第 12 図　２号方形周溝墓主体部実測図 …… 15
第 13 図　３号方形周溝墓実測図 …… 16
第 14 図　４号方形周溝墓実測図 …… 17
第 15 図　方形周溝墓出土遺物実測図 …… 18

# 写真図版目次

図版１　辺田遺跡遺構写真（１）
図版２　辺田遺跡遺構写真（２）
図版３　辺田遺跡遺構写真（３）
図版４　辺田遺跡遺構写真（４）
図版５　辺田遺跡出土遺物

# 第１章　調査に至る経緯と遺跡の位置及び周辺遺跡

## １　調査に至る経緯

平成 19 年８月１日、株式会社細田工務店から、戸建分譲住宅の建設を計画している千葉市中央区都町 1,117 － 12 他（面積 4,073.76㎡）について、「埋蔵文化財発掘の届出について（照会）」の文書が千葉市教育委員会教育長あてに提出された。

対象地については、過去に千葉市教育委員会生涯学習部生涯学習振興課が試掘を実施し、古墳時代の土坑（後に確認調査により方形周溝墓の一部と判明）が確認されていることから、市生涯学習振興課と事業者で協議した結果、土砂採取や擁壁によって既に削平されている範囲を除く 2,760㎡について、遺跡の規模及び性格を把握するために確認調査を実施することとなり、平成 19 年 10 月１日から 10 月 10 日まで財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターに委託して調査を実施した。その結果、弥生時代から古墳時代の方形周溝墓等が検出されたため、平成 19 年 10 月 15 日付けで 570㎡について引き続き本調査が必要な旨を事業者に通知した。

この結果に基づき、再度、市生涯学習振興課と事業者が協議し、本調査を実施することで合意したため、事業者の委託を受けた財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターが平成 19 年 11 月１日から 11 月 30 日まで本調査を実施した。　（千葉市教育委員会生涯学習部生涯学習振興課）

## ２　遺跡の位置及び周辺遺跡（第１・２・３図）

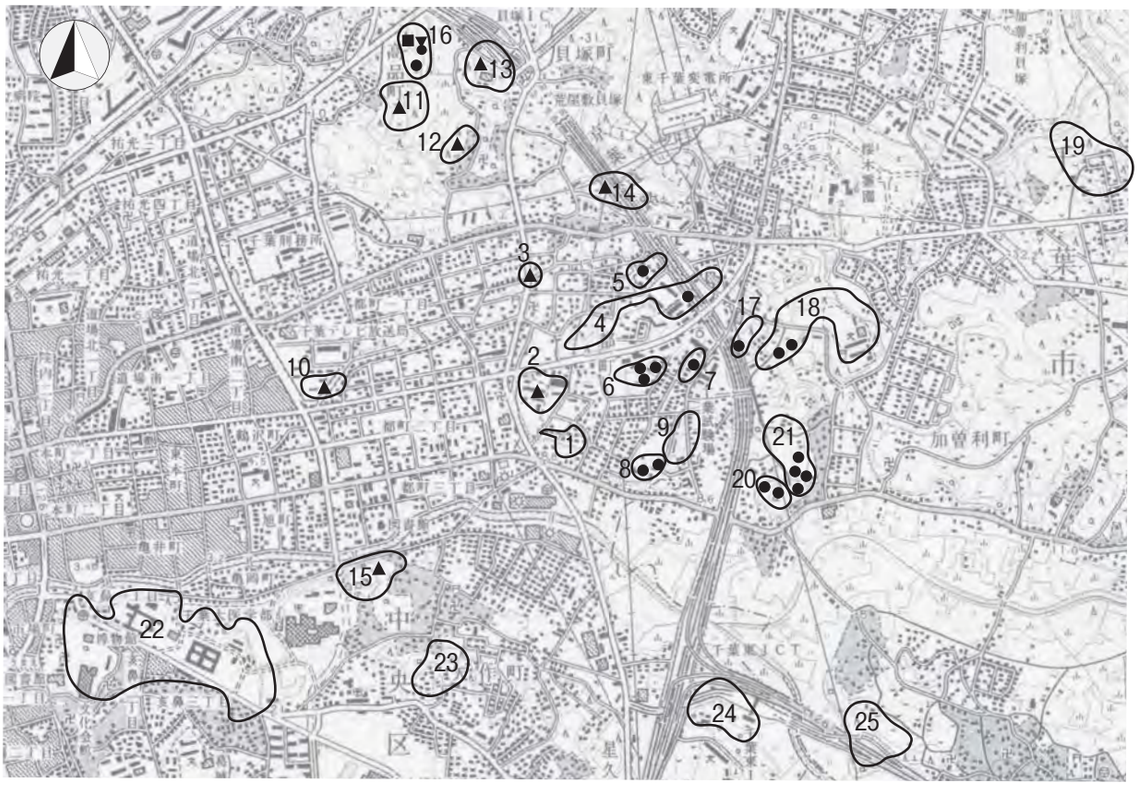
辺田遺跡－１は、都川北岸の標高約 20 ｍを測る舌状台地先端部に位置している。今回の調査区は遺跡の東側部分の県営住宅跡地である。調査区はほぼ平坦な地形であるが、東側と南側で台地が削平されており、険しい崖面になっている。大きく台地が削平されたため、現在、辺田遺跡は台地先端部に位置しているが、本来は台地平坦部の比較的標高が高い場所に位置していたと考えられる。

北西約 200 ｍの同一台地上には、縄文時代早・前期の集落跡・地点貝塚である向ノ台貝塚－２が所在する。向ノ台貝塚では縄文時代早期後半（条痕文期）の３カ所の貝層と、同時期の竪穴住居跡１軒・埋葬人骨４体が検出されている。北約 600m には早・前期の集落跡・地点貝塚である木戸場遺跡－３が所在し、北約 400 ｍの谷津を挟んだ台地上には、古墳時代の古墳群・墓域である都町山王遺跡－４が所在する。北東約 600 ｍの谷津を挟んだ台地上には、古墳がある天神台遺跡－５が所在する。北東約 300 ｍの同一台地上には、縄文時代の包蔵地である松原遺跡－６が所在する。北東約 400 ｍの同一台地上には、古墳時代中期の集落跡である蛤谷津上遺跡－７が所在する。南東約 300 ｍの同一台地上には、古墳時代前期の円墳がある御所ヶ原郭遺跡－８が所在する。東約 400m には弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡・墓域である和田前西遺跡－９が所在する。

辺田遺跡の所在する都川下流域や葭川流域には縄文時代早期・前期の集落跡や貝塚が点在している。西約 900m には前・中期の低地貝塚である宝導寺台遺跡－ 10、北西約 1.3km には早～後期の地点貝塚である貝堤遺跡－ 11、北約 900m には前期の貝塚である車坂遺跡－ 14、北約 1.1km には前期の貝塚である干場遺跡－ 12、北約１.4 km には前～中期の地点貝塚である荒屋敷西遺跡－ 13、南西



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:1　　08.4.1　10:24:32 AM




第1図　辺田遺跡の位置と周辺の遺跡　S=1/25,000　▲ 貝塚　● 古墳・塚

第2図　辺田遺跡の位置と周辺の遺跡（迅速図）　S=1/25,000　▲ 貝塚　● 古墳・塚



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:2　08.4.1　10:24:32 AM

約 800m には早～晩期の馬蹄形貝塚である矢作貝塚－ 15 が所在する。これらの遺跡は、辺田遺跡や向ノ台貝塚・木戸場遺跡とともに、縄文時代早・前期の集落跡や貝塚を中心とした遺跡群を形成していると考えられる。

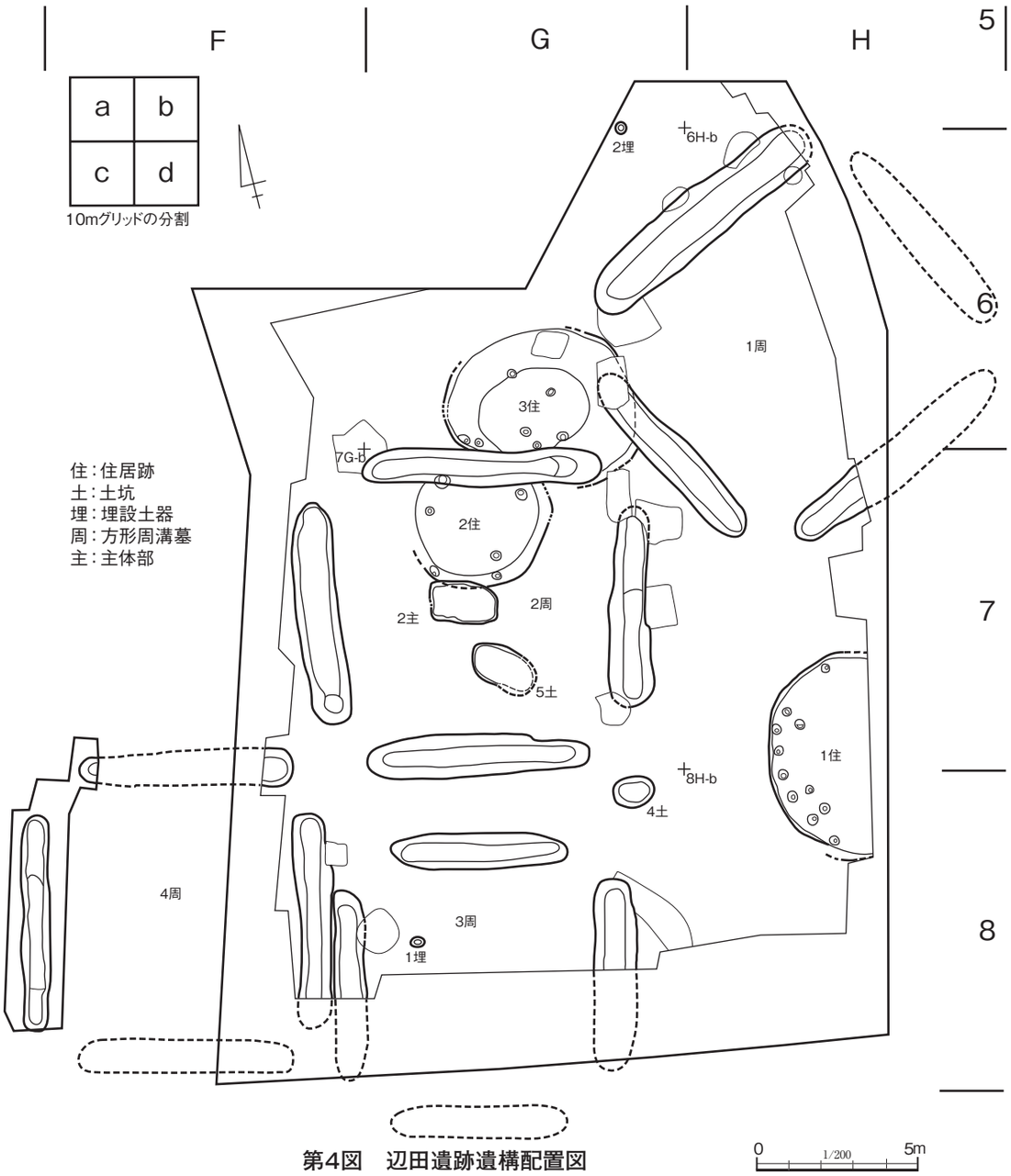
辺田遺跡の所在する都川下流域や葭川流域には弥生時代や古墳時代前期の集落跡や墓域も数多く点在している。北西約 1.5km には弥生時代後期の集落跡である東田遺跡－ 16、北約 900m には弥生時代後期の集落跡である車坂遺跡－ 14、北東約 700m には古墳時代の墓域である聖人塚遺跡（兼坂東遺跡）－ 17、北東約 1 km には古墳時代前期の集落跡である立木南遺跡－ 18、北東約 2.1km には弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡である古山遺跡－ 19、東約 800m には 3 基の円墳がある和田前遺跡－ 20、東約 800m には弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡である田向南遺跡－ 21、南西約

第3図　辺田遺跡位置図（S=1/5,000）



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:3　　08.4.1　10:24:33 AM

800m には弥生時代中期～古墳時代前期の集落跡である矢作貝塚－ 15、南西約 1.8km には弥生時代中期の集落跡である猪鼻城跡－ 22、南西約 1 km には古墳時代前期の集落跡である井合遺跡－ 23 が所在する。また、南東約 1 ㎞と南東約 1.5㎞の都川対岸には、弥生時代中期～古墳時代中期の集落遺跡である星久喜遺跡－ 24 と城之腰遺跡－ 25 がそれぞれ所在する。これらの遺跡は、辺田遺跡や都町山王遺跡・御所ヶ原郭遺跡・和田前西遺跡とともに、弥生時代中期～古墳時代前期の集落跡や墓域を中心とした遺跡群を形成していると考えられる。




第4図　辺田遺跡遺構配置図



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:4　　08.4.1　10:24:34 AM

## 第２章　検出された遺構と遺物

### １　概要

確認調査では、縄文時代前期の土坑１基、縄文時代の土坑１基、弥生時代中～後期の方形周溝墓３基、古墳時代前期の方形周溝墓１基、中近世の土坑１基が検出された。このうち、方形周溝墓群が検出された調査区南東部は本調査対象となった。本調査では確認調査で確認された方形周溝墓４基の他、縄文時代早期の竪穴住居跡３軒・土坑１基・埋設土器１基、縄文時代後期の埋設土器１基、平安時代の土坑１基が検出され、縄文土器や石器、弥生土器、土師器などが出土した。

１号方形周溝墓の周溝底面からは、古墳時代前期の土師器（鉢形土器と壺形土器）がまとまって出土した。３号方形周溝墓の北側周溝覆土下層からは、弥生時代中期後半の壺形土器２個体がまとまって出土した。２号方形周溝墓は主体部が検出され、木棺の痕跡は認められたが、墓に伴う副葬品は出土しなかった。

### ２　住居跡・土坑・埋設土器と出土遺物及び調査区出土遺物（第５～９図）

基本層序は、Ⅰ層旧耕作土：20 ～ 40cm（7.5YR3/2 黒褐色）、Ⅱｂ層縄文時代包含層：20cm 前後（7.5YR3/3 暗褐色：径１mm 程度の焼土粒・炭化物少）、Ⅱｃ層漸移層：20cm 前後（7.5YR3/4 暗褐色：径１mm 程度のローム粒少）、Ⅲ層ソフトローム層：20cm 前後（7.5YR4/4 褐色）である。

**１号住居跡**（第５図）

円形の竪穴住居跡で、長軸 6.6 m×短軸不明（3.1 m以上）、確認面から床面までの深度は－ 40㎝である。柱穴 11 本のうち主柱穴が３本確認され、Pit ４は床面から－ 39㎝、Pit ５は－ 36㎝、Pit ７は－ 48㎝である。炉は検出されなかった。遺物は撚糸文系と条痕文系の土器が出土しており、時期は縄文時代早期後半条痕文期と考えられる。

**２号住居跡**（第５図）

円形の竪穴住居跡で、長軸推定 4.5 m×短軸不明（3.4 m以上）、確認面から床面までの深度は－ 30㎝である。柱穴６本のうち主柱穴が２本壁際で確認され、Pit ３は床面から－ 35㎝、Pit ４は－ 45㎝である。炉は検出されなかった。遺物は撚糸文系と条痕文系の土器が出土しており、時期は縄文時代早期後半条痕文期と考えられる。

**３号住居跡**（第６図）

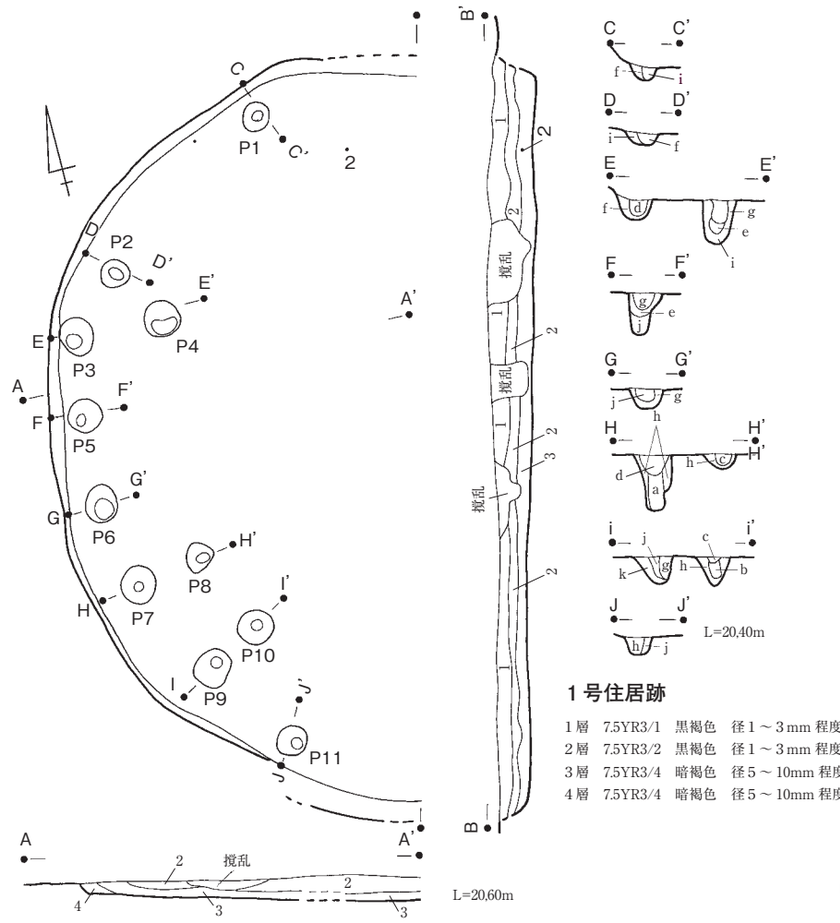
楕円形の竪穴住居跡で、長軸推定 6.2 m×短軸不明（4.7 m以上）、確認面から床面までの深度は－ 50㎝である。柱穴７本のうち主柱穴が２本壁際で確認され、Pit ５は床面から－ 32㎝、Pit ６は－ 46㎝である。炉は検出されなかった。断面はすり鉢状を呈しており、上端と下端との間に中端（段差）が確認された。遺物は撚糸文系と条痕文系の土器が出土しており、時期は縄文時代早期後半条痕文期と考えられる。

**４号土坑**（第７図）

楕円形の土坑で、長軸 1.3 m×短軸 0.9 m、確認面から床面までの深度は－ 13㎝である。遺物は条



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:5　　08.4.1　10:24:34 AM







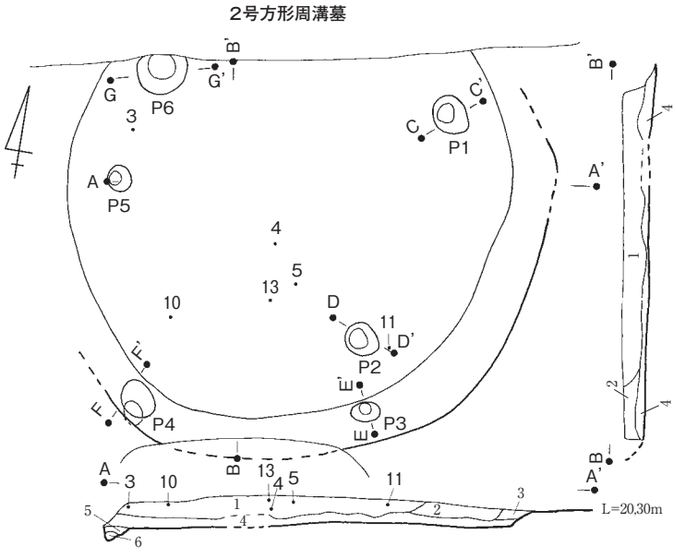
柱穴

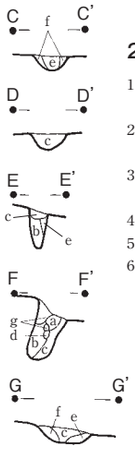
a 層　7.5YR3/1　黒褐色　径１～５mm 程度のローム粒多
b 層　7.5YR3/1　黒褐色　径１～５mm 程度のローム粒少
c 層　7.5YR3/2　黒褐色　径１～５mm 程度のローム粒多
d 層　7.5YR3/2　黒褐色　径１～５mm 程度のローム粒少
e 層　7.5YR3/2　黒褐色　径１～５mm 程度のローム粒微
f 層　7.5YR3/3　暗褐色　径１～５mm 程度のローム粒少
　　径５～ 10mm 程度のロームブロック少
g 層　7.5YR3/3　暗褐色　径１～５mm 程度のローム粒少
h 層　7.5YR3/3　暗褐色　径５～ 10mm 程度のロームブロック少
i 層　7.5YR3/4　暗褐色　径１～５mm 程度のローム粒少、
　　径５～ 10mm 程度のロームブロック少
j 層　7.5YR3/4　暗褐色　径５～ 10mm 程度のロームブロック少

## １号住居跡

１層　7.5YR3/1　黒褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物少、径１～３mm 程度のローム粒多
２層　7.5YR3/2　黒褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物微、径１～３mm 程度のローム粒少
３層　7.5YR3/4　暗褐色　径５～ 10mm 程度のロームブロック少
４層　7.5YR3/4　暗褐色　径５～ 10mm 程度のロームブロック多

0　1/60　2m



## ２号住居跡

１層　7.5YR3/1　黒褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物少、
　　径１～５mm 程度のローム粒少
２層　7.5YR3/3　暗褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物微、
　　径１～５mm 程度のローム粒多
３層　7.5YR3/4　暗褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物微、
　　径１～５mm 程度のローム粒少
４層　7.5YR4/3　褐色　　径５～ 10mm 程度のロームブロック少
５層　7.5YR3/3　暗褐色　径１～５mm 程度のローム粒多
６層　7.5YR3/2　黒褐色　径１～５mm 程度のローム粒多

柱穴

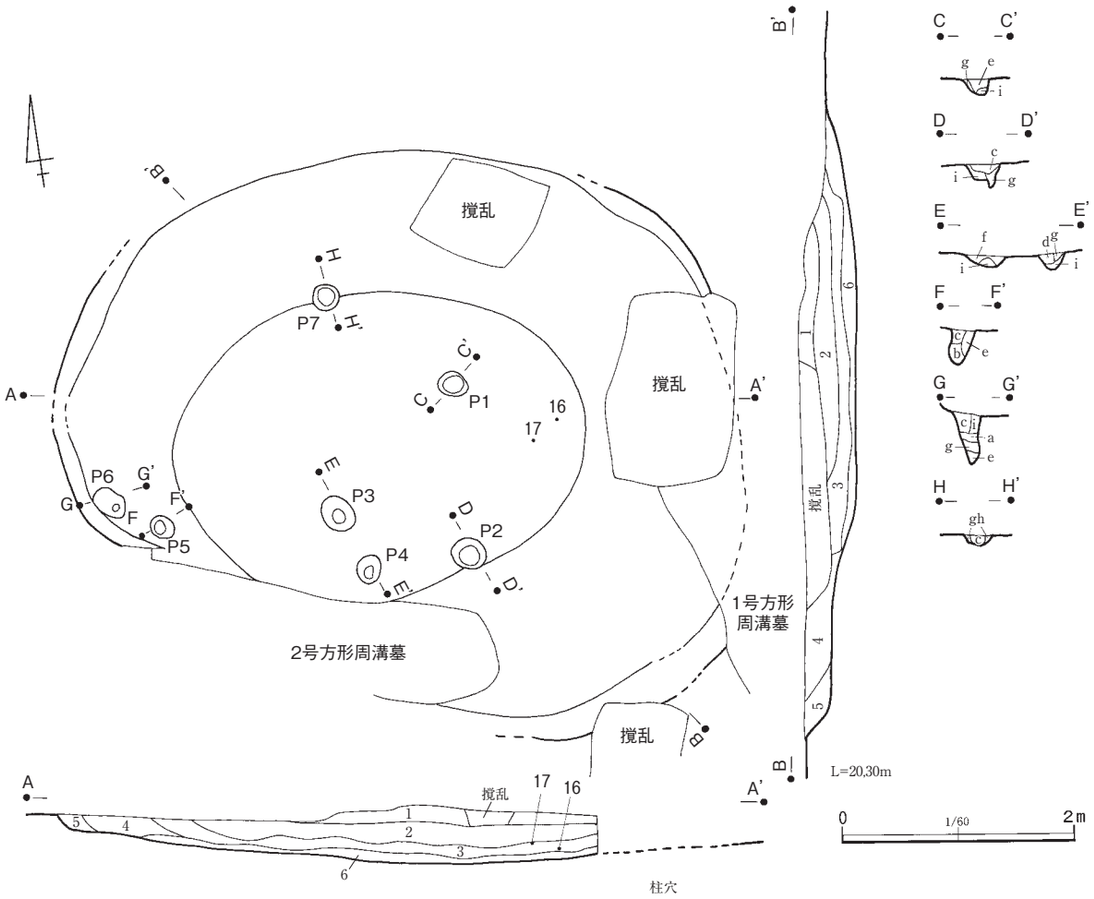
a 層　7.5YR3/2　黒褐色　径１～５mm 程度のローム粒多
b 層　7.5YR3/2　黒褐色　径１～５mm 程度のローム粒少
c 層　7.5YR3/3　暗褐色　径１～５mm 程度のローム粒多
d 層　7.5YR3/3　暗褐色　径１～５mm 程度のローム粒少
e 層　7.5YR3/4　暗褐色　径１～５mm 程度のローム粒少
f 層　7.5YR4/3　褐色
g 層　7.5YR4/4　褐色　　ロームブロック

0　1/60　2m

**第５図　１・２号住居跡実測図**



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:6　　08.4.1　10:24:34 AM




1層　7.5YR3/2　黒褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物少、径１～５mm 程度のローム粒少
2層　7.5YR3/1　黒褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物少、径１～５mm 程度のローム粒少
3層　7.5YR3/3　暗褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物微、径１～５mm 程度のローム粒多
4層　7.5YR3/4　暗褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物微、径１～５mm 程度のローム粒多
5層　7.5YR4/3　褐色　径１～５mm 程度のローム粒多、径５～10mm 程度のロームブロック少
6層　7.5YR4/4　褐色　径１～５mm 程度のローム粒少、径５～10mm 程度のロームブロック多

柱穴
a層　7.5YR3/1　黒褐色　径１～５mm 程度のローム粒多
b層　7.5YR3/1　黒褐色　径１～５mm 程度のローム粒少
c層　7.5YR3/2　黒褐色　径１～５mm 程度のローム粒多
d層　7.5YR3/3　暗褐色　径１～５mm 程度のローム粒多
e層　7.5YR3/3　暗褐色　径１～５mm 程度のローム粒少
f層　7.5YR3/4　暗褐色　径１～５mm 程度のローム粒多
g層　7.5YR3/4　暗褐色　径１～５mm 程度のローム粒少
h層　7.5YR4/3　褐色　径５～20mm 程度のロームブロック少
i層　7.5YR4/3　褐色

**第６図　３号住居跡実測図**

痕文系の土器が出土しており、時期は縄文時代早期後半条痕文期と考えられる。

**５号土坑**（第７図）

楕円形の土坑で、長軸不明（1.4 m以上）×短軸 1.2 m、確認面から床面までの深度は－ 22cmである。遺物は土師器の椀が出土しており、時期は平安時代と考えられる。

**１号埋設土器**（第７図）

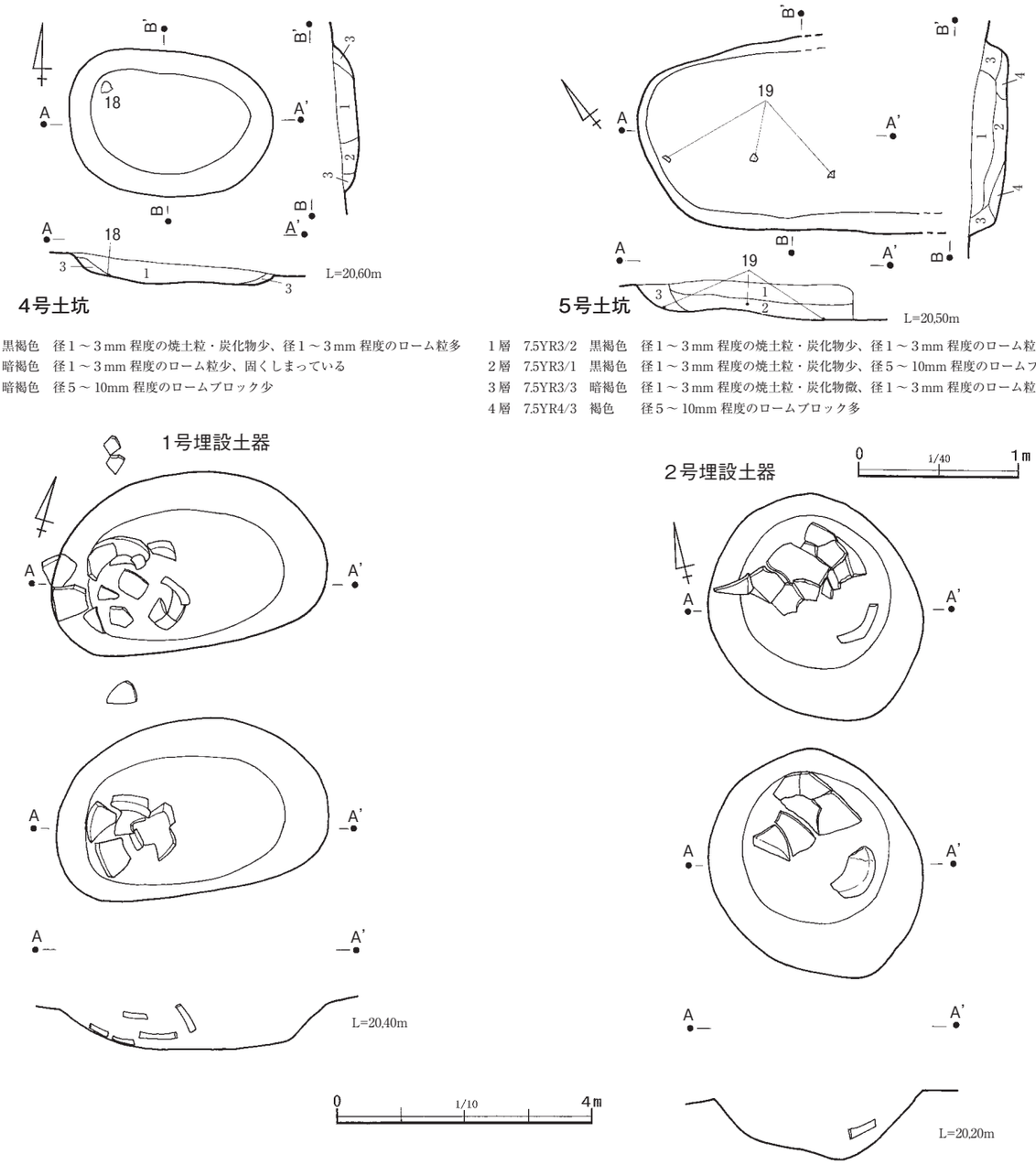
掘り込みは楕円形で、長軸 42cm×短軸 27cm、確認面から床面までの深度は－ 7cmである。遺物は条痕文系の茅山式土器が出土しており、時期は縄文時代早期後半茅山式期と考えられる。

**２号埋設土器**（第７図）

掘り込みは円形で、長軸 37cm×短軸 32cm、確認面から床面までの深度は－ 11cmである。遺物は称名寺１式土器が出土しており、時期は縄文時代後期初頭称名寺１式期と考えられる。



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:7　　08.4.1　10:24:36 AM




4号土坑

1層　7.5YR3/1　黒褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物少、径１～３mm 程度のローム粒多
2層　7.5YR3/3　暗褐色　径１～３mm 程度のローム粒少、固くしまっている
3層　7.5YR3/4　暗褐色　径５～ 10mm 程度のロームブロック少

5号土坑

1層　7.5YR3/2　黒褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物少、径１～３mm 程度のローム粒多
2層　7.5YR3/1　黒褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物少、径５～ 10mm 程度のロームブロック少
3層　7.5YR3/3　暗褐色　径１～３mm 程度の焼土粒・炭化物微、径１～３mm 程度のローム粒微
4層　7.5YR4/3　褐色　　径５～ 10mm 程度のロームブロック多

**第７図　４・５号土坑、１・２号埋設土器実測図**

**住居跡・土坑・埋設土器出土遺物**（第８図）

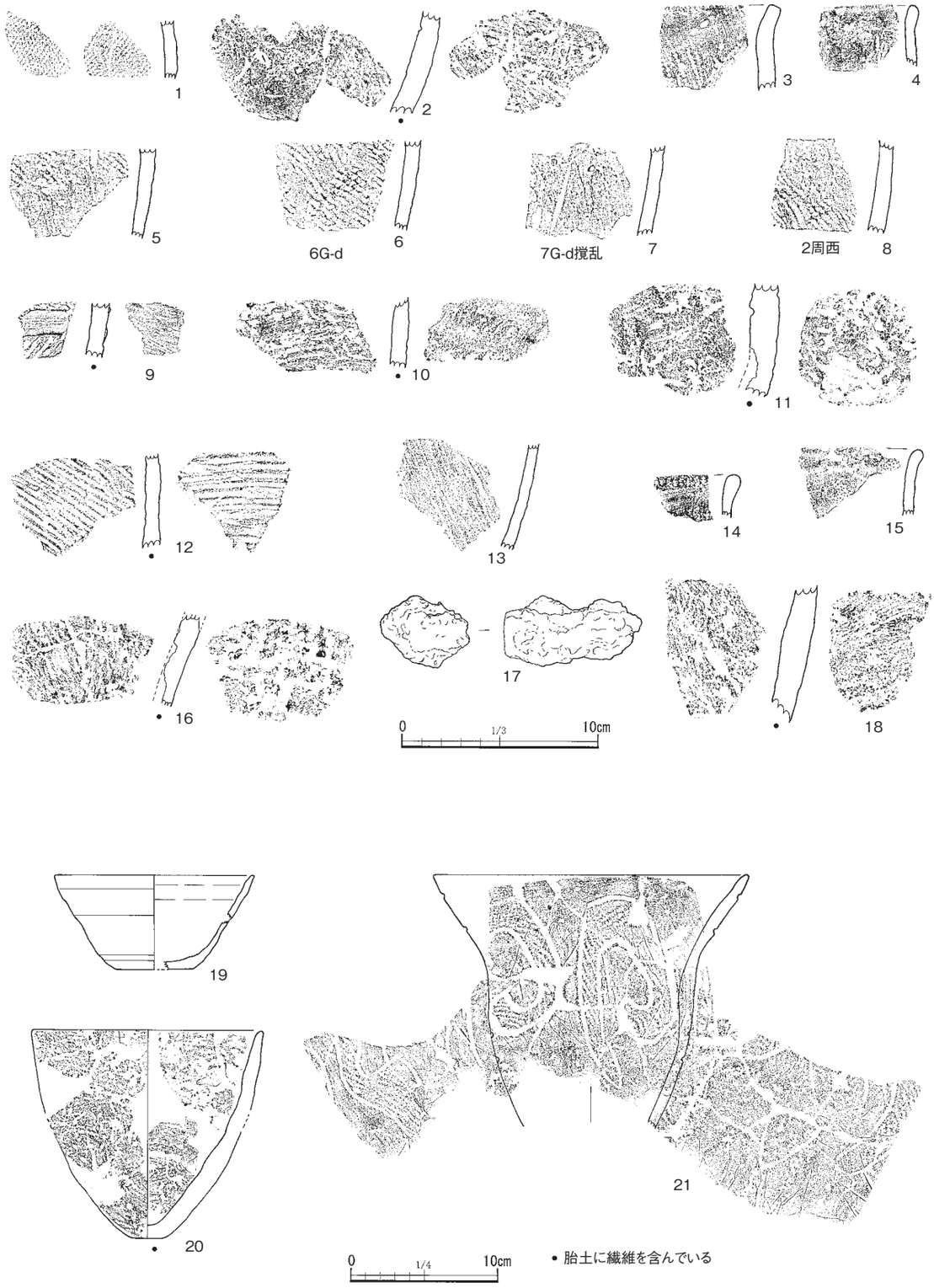
19 は平安時代の所産で他は縄文時代の所産である。

１・２は１号住居跡出土である。１は早期深鉢の胴部破片で、ＲＬ縄文が施されている。Pit ３から出土している。２は早期後半条痕文系深鉢の胴部破片（底部付近）で、胎土に繊維が含まれている。床面直上から出土している。

３～５・９～ 13 は２号住居跡出土である。６～８は調査区及び方形周溝墓出土であるが、５～８



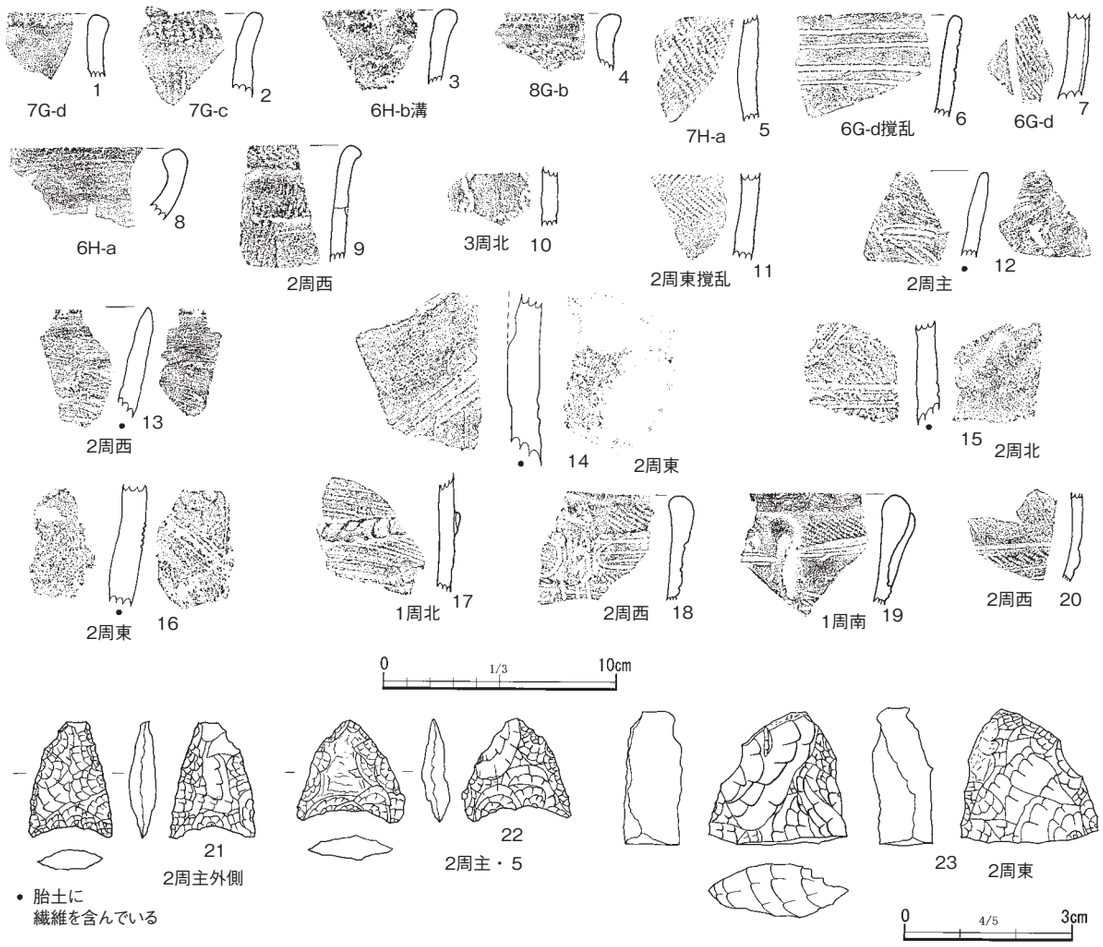
48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:8　　08.4.1　10:24:36 AM




**第８図　住居跡、土坑、埋設土器出土遺物実測図**



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:9　　08.4.1　10:24:37 AM




**第９図　調査区出土遺物実測図**

は同一個体であるため、ここに掲載した。３・４は早期前半撚糸文系深鉢の口縁部破片で、口縁部に撚糸文Ｌが施されている。５～８は早期深鉢の胴部破片で、無節縄文Ｒが施されている。９は早期後半条痕文系深鉢の胴部破片で、繊維は少なく、微隆起線文と集合沈線が施され、野島式と考えられる。10～12は早期後半条痕文系深鉢の胴部破片で、胎土に繊維が含まれている。13は深鉢胴部破片で、条線が施されている。

14～17は３号住居跡出土である。14は早期前半深鉢の口縁部破片で、口唇部に絡条体圧痕文Ｒが施されている。15は早期前半深鉢の口縁部破片で、無文である。16は早期後半条痕文系深鉢の胴部破片で、胎土に繊維が含まれている。17は安山岩製磨石の破片で、長さ2.0㎝・幅3.5㎝・厚さ7.0㎝・重さ90.6ｇである。

18は４号土坑出土である。早期後半条痕文系深鉢の胴部破片で、胎土に繊維が含まれている。

19は５号土坑出土である。平安時代の土師器の椀で、復元口径13.6㎝・復元底径5.4㎝・復元器高6.4㎝である。口縁部が１／４、胴部が１／８、底部が１／４残存している。色調は、外面が10YR3/2黒褐色で、内面が7.5YR4/2灰褐色である。胎土は石英・長石を多く含む。



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:10　　08.4.1　10:24:38 AM

20は１号埋設土器である。早期後半条痕文系深鉢で、茅山下層式と考えられる。復元口径15.8㎝・底径1.6㎝・器高14.2㎝である。口縁部が１／３、胴部が１／２残存しており、底部は先端部が欠損している。色調は、外面が7.5YR6/4にぶい橙色、内面が10YR6/4にぶい黄橙色で、胎土に繊維が含まれている。

21は２号埋設土器である。後期初頭称名寺１式の深鉢で、口縁部～胴部にＪ字文が施されており、施文順位はＬＲ縄文→沈線区画→磨消である。復元口径21.5㎝・残存器高17.2㎝である。口縁部が１／４、胴部が１／２残存しており、底部が欠損している。色調は、外面が5YR2/1黒褐色で、内面が2.5YR3/6暗赤褐色である。胎土は石英・長石を多く含む。

**調査区出土遺物**（第９図）

１～８は調査区出土遺物である。９～23は方形周溝墓から出土した遺物であるが、縄文時代のものは調査区出土遺物と同じ扱いであるため、ここに掲載した。21～23の石器は２号方形周溝墓から出土しており、弥生時代の所産である可能性も捨てきれない。しかし、本報告では縄文時代の遺物として扱うことにし、ここに掲載した。

１は早期前半深鉢の口縁部破片で、口唇部にＬＲ縄文が施されている。２は早期前半撚糸文系深鉢の口縁部破片で、口唇部にＬＲ縄文が施され、口縁部に撚糸文Ｒが施されている。３は早期前半深鉢の口縁部破片で、無文である。４は早期前半深鉢の口縁部破片で、口唇部と口縁部にＬＲ縄文が施されている。５は早期深鉢の胴部破片で、ＬＲ縄文が施されている。６は前期深鉢の口縁部破片で、半裁竹管状工具による２条の条線と、ＲＬ縄文が施されている。７は後期初頭称名寺１式の深鉢の胴部破片で、施文順位はＬＲ縄文→沈線区画→磨消である。８は後期初頭の深鉢の口縁部破片で、無文である。

９は早期前半撚糸文系深鉢の口縁部破片で、口唇部にＲＬ縄文が施され、口縁部に撚糸文Ｒが施されている。10は前期の深鉢の胴部破片で、結節縄文が施されている。11は早期の深鉢の胴部破片で、ＬＲ縄文とＲＬ縄文が交互に施されている。12・13は早期後半条痕文系深鉢の口縁部破片で、胎土に繊維が含まれている。12は半裁竹管状工具による２条の条線が描かれ、13は繊維状工具による沈線が描かれている。14・15・16は早期後半条痕文系深鉢の胴部破片で、胎土に繊維が含まれている。14は繊維状工具による太い沈線が描かれ、15・16は半裁竹管状工具による２条の条線が描かれている。12～16は茅山式と考えられる。17は後期末～晩期初頭安行２～３ａ式の紐線文系深鉢の胴部破片で、施文順位は条線→紐線貼付である。18・19は晩期初頭安行３ａ式の帯縄文系深鉢の口縁部破片で、施文順位はＲＬ縄文→沈線区画→磨消である。20は後期末～晩期初頭安行２～３ａ式の帯縄文系深鉢の胴部破片で、施文順位はＲＬ縄文→沈線区画→磨消である。21は先端部を欠損しているチャート製の石鏃で、長さ2.1cm×幅1.55cm×厚さ0.5cm×重さ1.3ｇである。22は安山岩製の石鏃で、長さ1.85cm×幅1.95cm×厚さ0.5cm×重さ1.2ｇである。23はガラス質黒色安山岩製の石鏃未製品で、長さ2.45cm×幅2.5cm×厚さ1.0cm×重さ6.5ｇである。



48018千葉市辺田遺跡H19.indd Sec1:11 08.4.1 10:24:39 AM

## ３　方形周溝墓と出土遺物（第 10 ～ 15 図）

### １号方形周溝墓（第 10 図）

検出状況は３辺部分で、主軸方位はＮ－ 25°－Ｗ、規模は長軸 11.3 ｍ×短軸不明である。周溝の長さは長辺推定 8.5 ｍ×短辺推定 6.5 ｍ、幅 1.2 ～ 1.7 ｍ、確認面から床面までの深度は－ 60㎝である。遺物は北側周溝底面から古墳時代前期の土師器（鉢形土器と壺形土器）がまとまって出土しており、時期は古墳時代前期と考えられる。主体部は検出されなかった。

### ２号方形周溝墓（第 11・12 図）

検出状況は４辺全体で、主軸方位はＮ－ 15°－Ｅ、規模は長軸 11.2 ｍ×短軸 10.2 ｍである。周溝の長さは長辺 7.4 ｍ×短辺 6.9 ｍ、幅 1.4 ｍ、確認面から床面までの深度は－ 70㎝である。遺物は周溝覆土から弥生時代中～後期の土器が出土しており、時期は弥生時代中～後期と考えられる。中央部分より主体部が検出された。主体部の主軸方位はＮ－ 105°－Ｅ、規模は長軸 2.1 ｍ×短軸 1.3 ｍ、確認面から床面までの深度は－ 14㎝である。木棺の痕跡が確認され、規模は長軸 1.9 ｍ×短軸 0.7 ｍである。覆土全てを対象として、２㎜メッシュで土壌選別作業を行った。縄文時代早期の土器片と石鏃・剥片類が出土したが、方形周溝墓に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。２号方形周溝墓の主体部は縄文時代早期の２号住居跡と切り合っており、出土した遺物は縄文時代の所産と考えられる。

### ３号方形周溝墓（第 13 図）

検出状況は３辺部分で、主軸方位はＮ－ 15°－Ｅ、規模は長軸 9.5 ｍ×短軸不明である。周溝の長さは長辺 5.5 ｍ×短辺不明、幅 1.3 ｍ、確認面から床面までの深度は－ 65㎝である。遺物は北側周溝覆土下層から弥生時代中期後半の壺形土器２個体がまとまって出土している。うち１個体は宮ノ台３式古段階に位置づけられ、時期は弥生時代中期後半宮ノ台３式期と考えられる。主体部は検出されなかった。

### ４号方形周溝墓（第 14 図）

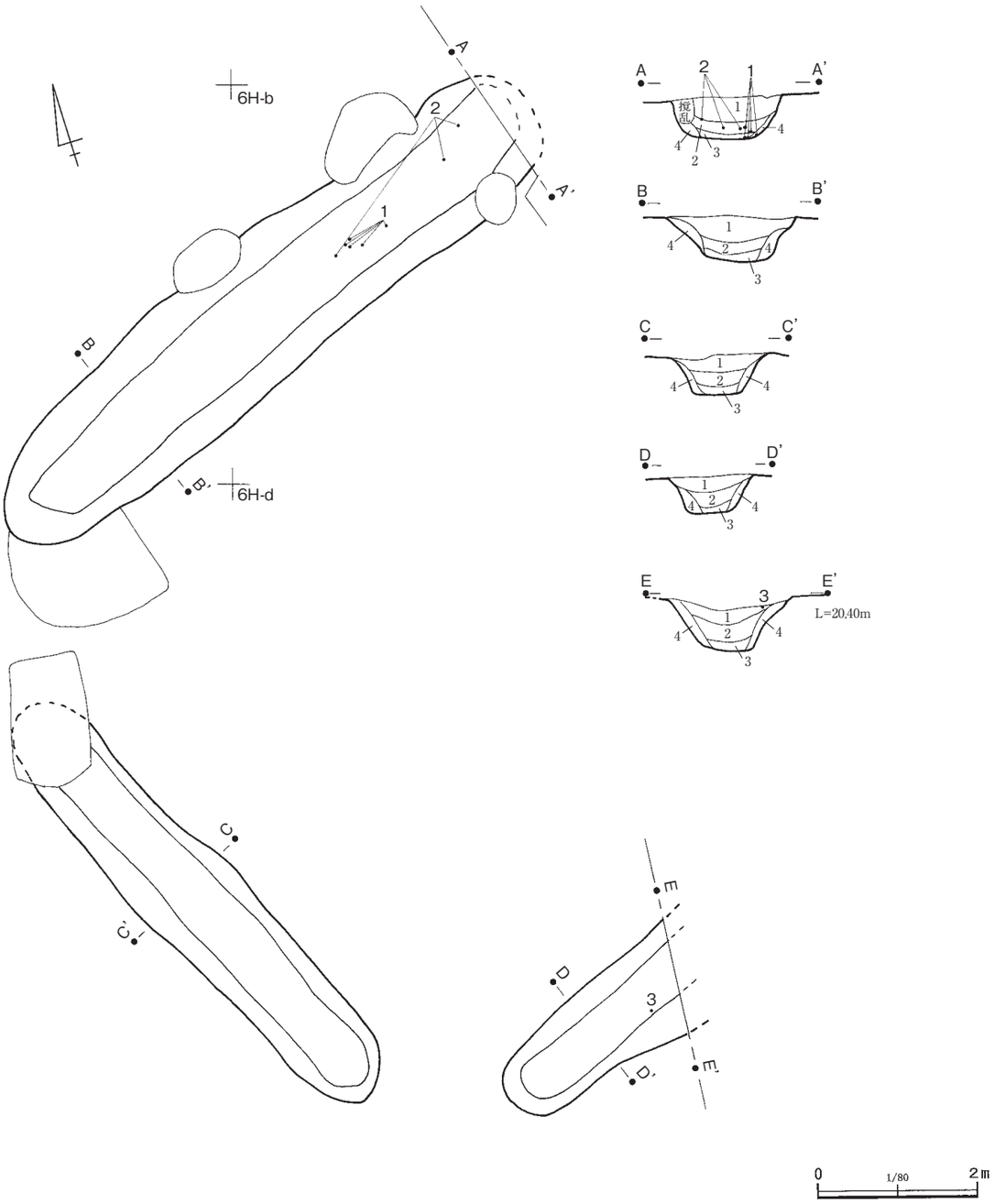
検出状況は３辺部分で、主軸方位はＮ－ 15°－Ｅ、規模は長軸 9.8 ｍ×短軸不明である。周溝の長さは長辺推定 6.7 ｍ×短辺不明、幅 1.4 ｍ、確認面から床面までの深度は－ 50㎝である。遺物は周溝覆土から弥生時代中～後期の土器が出土しており、時期は弥生時代中～後期と考えられる。主体部があると推定される中央部分は調査区域外であるため、主体部の有無は不明である。

３号方形周溝墓と４号方形周溝墓は、幾分不明瞭ではあるが、切り合い関係が認められ、３号（古）→４号（新）の新旧関係が捉えられる。また、２号方形周溝墓と４号方形周溝墓は規模や主軸方位、周溝の形状で共通関係が認められ、ほぼ同時期であると考えられる。

弥生時代の２～４号方形周溝墓の周溝の掘り方に特徴がみられる。底面が隅丸方形のプランできつい傾斜で立ち上がるもの（Ａ）類と、底面が楕円形のプランで緩い傾斜でだらだらと立ち上がるもの（Ｂ）類が、時計回りに交互になっている。例えば、２号方形周溝墓の北側周溝西端は（Ａ）類であるが、東端は（Ｂ）類である。続いて東側周溝北端は（Ａ）類・南端は（Ｂ）類、南側周溝の東端は（Ａ）類・西端は（Ｂ）類、西側周溝南端は（Ａ）類・北端は（Ｂ）類というように構築されている。３号方形周溝墓は２号方形周溝墓と同様な配置になっており、北側周溝西端は（Ａ）類、東端は（Ｂ）類である。続いて東側周溝北端は（Ａ）類、西側周溝北端は（Ｂ）類である。一方、４号方形周溝墓の北側



48018千葉市辺田遺跡H19.indd Sec1:12 08.4.1 10:24:39 AM

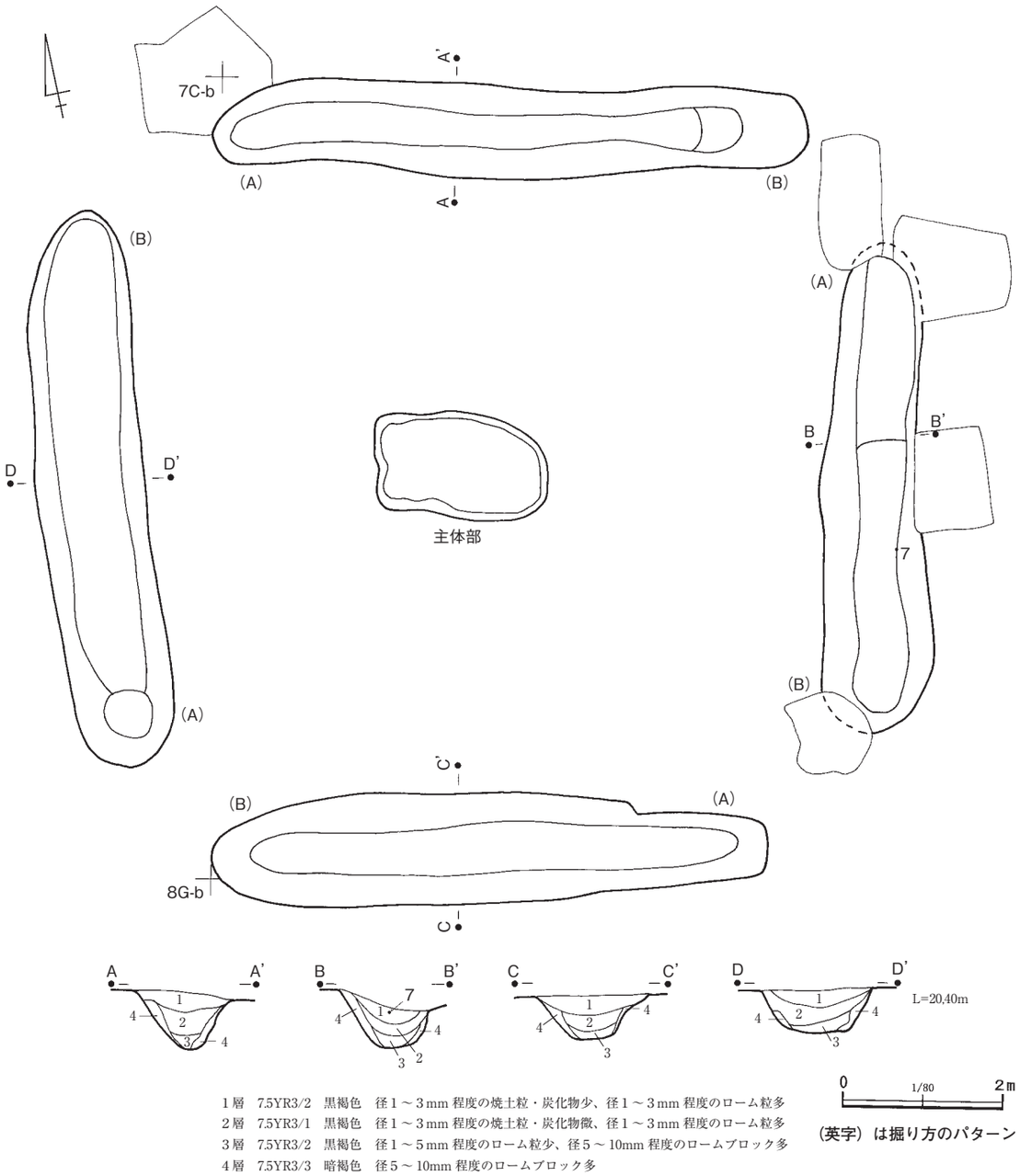



1層　7.5YR3/2　黒褐色　径1～3mm 程度の焼土粒・炭化物少、径1～3mm 程度のローム粒多
2層　7.5YR3/1　黒褐色　径1mm 程度の焼土粒・炭化物微、径1～3mm 程度のローム粒少
3層　7.5YR3/2　黒褐色　径1～5mm 程度のローム粒少、径5～20mm 程度のロームブロック少
4層　7.5YR3/3　暗褐色　径1～5mm 程度のローム粒多、径5～10mm 程度のロームブロック少

**第10図　1号方形周溝墓実測図**



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:13　　08.4.1　10:24:39 AM




1層　7.5YR3/2　黒褐色　径1～3mm 程度の焼土粒・炭化物少、径1～3mm 程度のローム粒多
2層　7.5YR3/1　黒褐色　径1～3mm 程度の焼土粒・炭化物微、径1～3mm 程度のローム粒多
3層　7.5YR3/2　黒褐色　径1～5mm 程度のローム粒少、径5～10mm 程度のロームブロック多
4層　7.5YR3/3　暗褐色　径5～10mm 程度のロームブロック多

**第 11 図　２号方形周溝墓実測図**

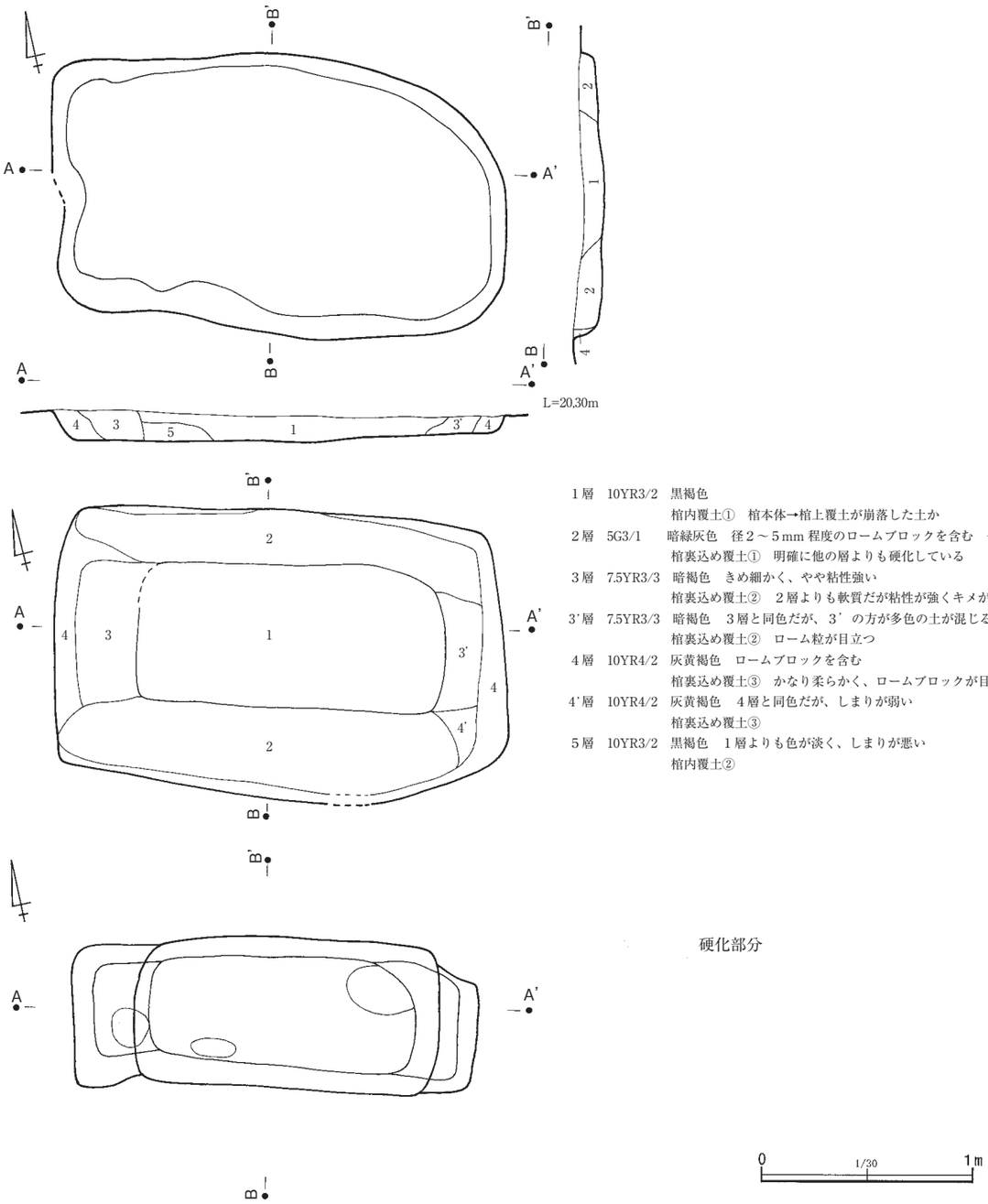
周溝東端は（A）類であるが、西端は（B）類である。続いて西側周溝北端は（A）類、東側周溝北端は（B）類というように、反時計周りに配置されている。

**方形周溝墓出土遺物**（第 15 図）

１～５は１号方形周溝墓から出土している。１・２は北側周溝底面から、３は南側周溝覆土上層から、４は南側周溝覆土より、５は西側周溝の撹乱から出土している。１は古墳時代前期の土師器の鉢



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:14　　08.4.1　10:24:40 AM

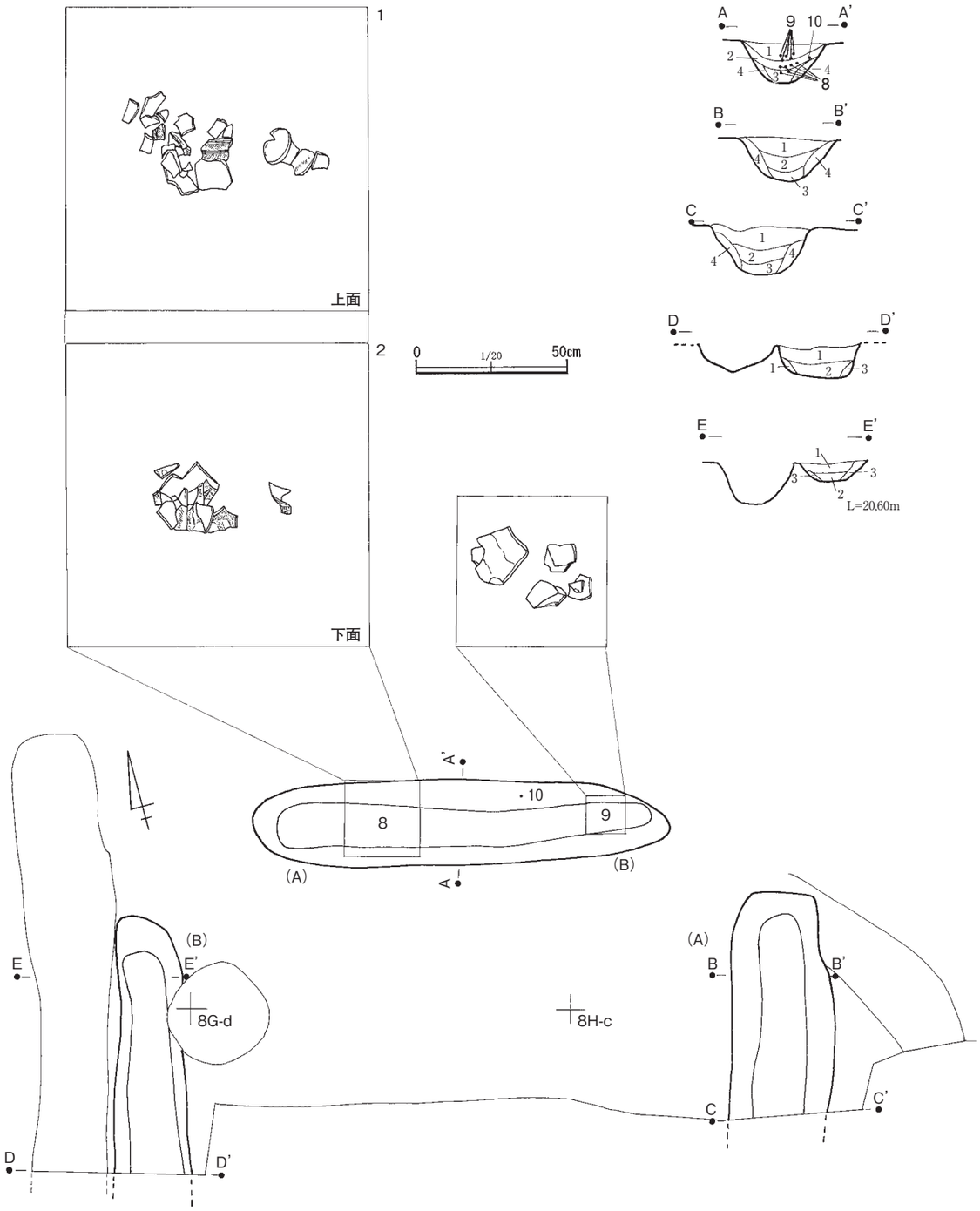



**第 12 図　２号方形周溝墓主体部実測図**

で、復元口径 10.4cm ×底径 4.2cm ×器高 6.7cm である。口縁部が２/ ３、底部が完全に残存している。外面は右回り縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整が施されている。色調は、外面が 7.5YR5/4 にぶい褐色で、内面が 7.5YR6/4 にぶい橙色である。胎土は小砂粒を多く含む。２は古墳時代前期の土師器の壺で、残存胴部径 13.2cm ×底径 5.8cm ×残存器高 7.6cm である。底部が完全に残存している。外面は斜方向のヘラナデ調整、内面は縦方向のミガキ調整が施されている。黒斑が 0°・45°・90



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:15　　08.4.1　10:24:41 AM



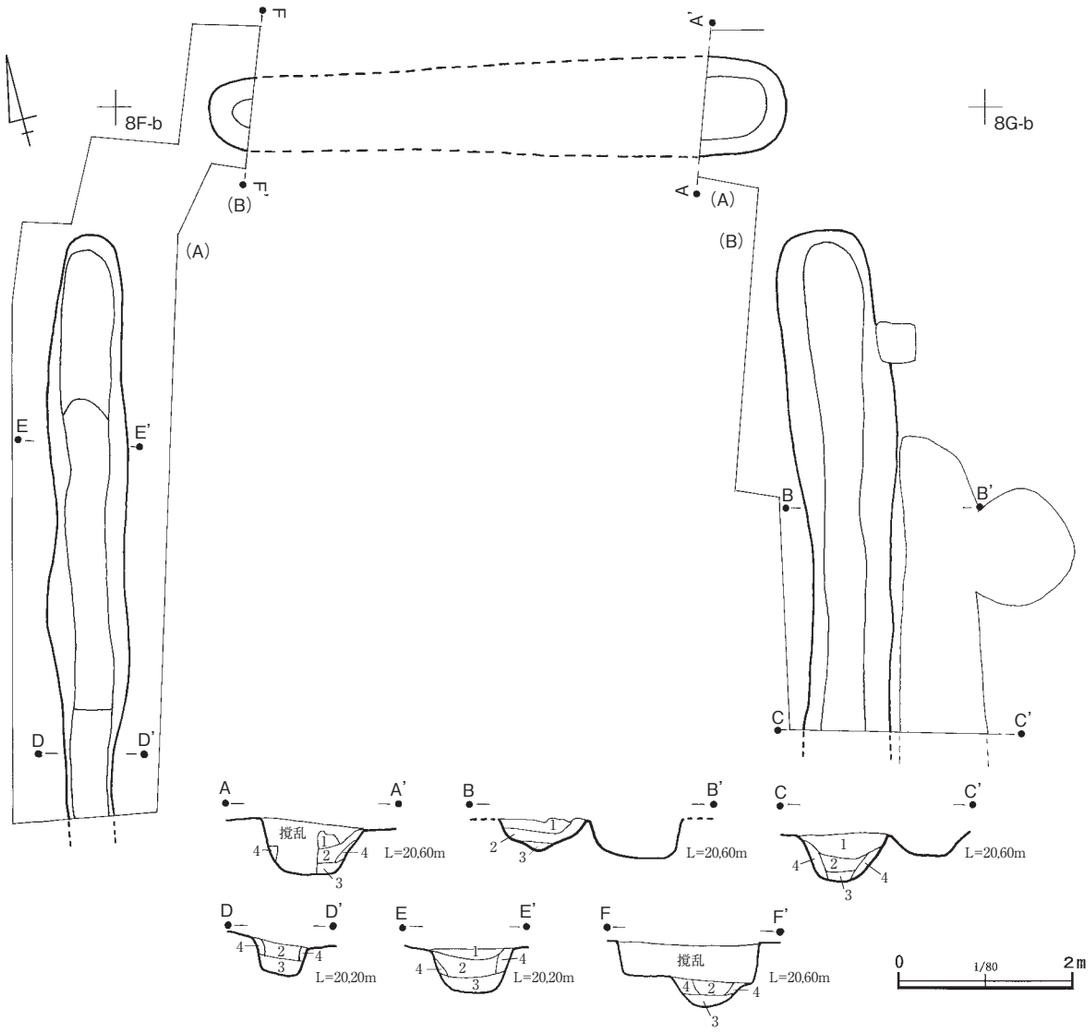

1層　7.5YR3/2　黒褐色　径1～3mm 程度の焼土粒・炭化物少、径1～3mm 程度のローム粒多
2層　7.5YR3/1　黒褐色　径1mm 程度の焼土粒・炭化物微、径1～3mm 程度のローム粒少
3層　7.5YR3/2　黒褐色　径1～5mm 程度のローム粒少、径5～10mm 程度のロームブロック少
4層　7.5YR3/3　暗褐色　径1～5mm 程度のローム粒少、径5～10mm 程度のロームブロック多

（英字）は掘り方のパターン

**第13図　3号方形周溝墓実測図**



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:16　　08.4.1　10:24:41 AM




1層　7.5YR3/2　黒褐色　径1～3mm 程度の焼土粒・炭化物少、径1～3mm 程度のローム粒多
2層　7.5YR3/1　黒褐色　径1mm 程度の焼土粒・炭化物微、径1～3mm 程度のローム粒少
3層　7.5YR3/2　黒褐色　径1～5mm 程度のローム粒少、径5～10mm 程度のロームブロック少
4層　7.5YR3/3　暗褐色　径1～5mm 程度のローム粒少、径5～10mm 程度のロームブロック多

（英字）は掘り方のパターン

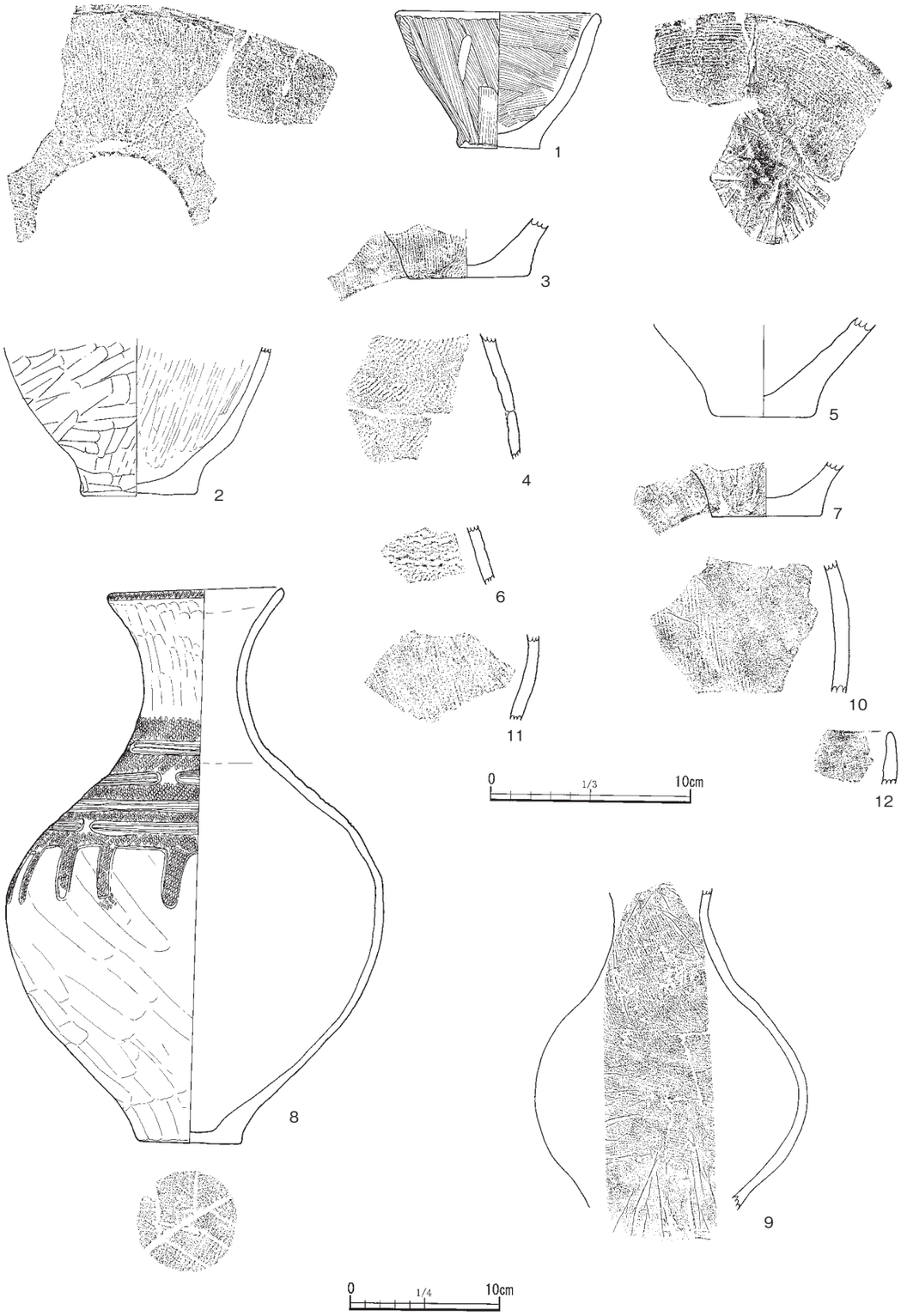
**第14図　4号方形周溝墓実測図**

°の位置の胴部外面3ヶ所と胴部内面1ヶ所に存在する。胴部の割れ口がきれいにそろっており、輪積みした粘土紐の境目で割れていると考えられる。色調は、外面が10YR7/4にぶい黄橙色で内面が10YR6/6明黄褐色である。胎土は小砂粒を多く含む。3は弥生時代後期の壺または甕の底部破片で、底径6.0cm ×残存器高2.5cm である。底部が完全に残存している。外面は右廻り縦方向のハケ調整が施されている。4は弥生時代中期後半宮ノ台式の壺の頸部～胴部破片である。外面は赤彩され、施文順位はＬＲ縄文→磨消である。内面が剥離している。5は弥生時代中～後期の壺または甕の底部破片で、復元底径5.2cm ×残存器高5.0cm である。底部が1／5残存している。

6・7は2号方形周溝墓から出土している。6は西側周溝覆土より、7は東側周溝の覆土上層より



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:17　　08.4.1　10:24:42 AM




**第 15 図　方形周溝墓出土遺物実測図**



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:18　　08.4.1　10:24:43 AM

出土している。６は弥生時代後期の甕の胴部破片である。櫛描波状文とＬＲ縄文が施されている。７は弥生時代中～後期の甕の底部破片で、底径 5.7cm ×残存器高 2.5cm である。底部がほぼ完全に残存している。外面は縦方向のハケ調整が施された後、磨かれている。内面には炭化物が付着している。

８～10 は３号方形周溝墓から出土している。８・９は北側周溝覆土下層から、10 は北側周溝覆土上層から出土している。８は弥生時代中期後半の壺で、口径 11.9cm ×底径 7.0cm ×復元胴部最大径 25.2cm ×器高 37.1cm である。口縁部が３／４、頸部がほぼ完全、胴部上半が４／５、胴部下半がほぼ完全、底部が完全に残存している。胴部最大径付近が１／４しか残存しておらず、この部位で破損した状況が考えられる。外面は、口唇部にＬＲ縄文、頸部に縦方向のミガキが施されている。さらに、胴部上半の２条または１条の平行沈線による楕円区画文内と、胴部最大径付近の垂下文内に、ＬＲ縄文が磨消手法で施された後、胴部下半に斜方向のナデ調整が施されている。また、楕円区画文内では横方向に、垂下文内では縦方向に、縄文施文の方向を変えている。内面はミガキ調整が施され、底部には木葉痕が残されている。黒班は頸部に１ヶ所あり、そこから 45° の位置に胴部１ヶ所、底部付近１ヶ所ある。色調は、外面が 7.5YR4/3 褐色で、内面が 7.5YR6/4 にぶい橙色である。胎土は小砂粒をわずかに含む。型式学的特長から宮ノ台３式古段階に位置づけられる。９は弥生時代中期後半の壺で、復元胴部最大径 18.4cm ×残存器高 21.3cm である。頸部が１／２、胴部が２／３残存しており、口縁部と底部が欠損している。外面は、胴部下半に右回り斜方向のハケ調整の後ミガキ調整が施されている。内面はナデ調整が施されている。色調は外面が 7.5YR4/6 褐色で、内面が 7.5YR5/4 にぶい褐色である。胎土は小砂粒が多く、白色粒子をわずかに含む。８に伴う出土状況から８と同じく宮ノ台３式に位置づけられる。10 は弥生時代中期後半宮ノ台式の壺の胴部破片である。外面に櫛歯状工具による縦方向の条線が施されている。内面が剥離している。

11・12 は４号方形周溝墓から出土している。11 は東側周溝覆土から、12 は西側周溝の撹乱から出土している。11 は弥生時代後期の甕の胴部破片である。外面に櫛歯状工具による縦方向の条線が施されている。外面に炭化物が付着している。12 は古墳時代前期の土師器椀の口縁部破片である。内外面とも横方向のナデ・ミガキの後に赤彩されている。

## ＜参考文献＞


宍倉昭一郎 「向の台貝塚」『千葉市史　原始古代中世編』 1974　千葉市

千葉市史編纂委員会 「向の台貝塚」『千葉市史史料編１　原始古代中世』 1976　千葉市

湖口淳一 『千葉市蛤谷津上遺跡』 1995 （財）千葉市文化財調査協会

『千葉県埋蔵文化財分布地図（3）－千葉市・市原市・長生地区（改訂版）－』 1999　千葉県教育委員会

古谷　渉 『千葉市都町山王遺跡－平成 13 年度調査－』 2002 （財）千葉市文化財調査協会

長原　亘 「２　千葉市弥生時代遺跡集成－千葉市の弥生時代を考える①－」『埋蔵文化財調査センター年報 18 －平成 16 年度－』 2006 （財）千葉市教育振興財団

古谷　渉 「４．市内遺跡調査の概要　辺田遺跡」『平成 19 年度千葉市遺跡発表会要旨』 2008 （財）千葉市教育振興財団

古谷　渉 「３．辺田遺跡」『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書－平成 19 年度－』 2008　千葉市教育委員会




48018千葉市辺田遺跡H19.indd Sec1:19　08.4.1 10:24:44 AM

## 第３章　まとめ

### １　縄文時代の調査成果

縄文時代早期後半（条痕文期）の集落跡が検出されたことが特筆すべき成果である。同一台地上の先端部には同時期の地点貝塚を伴う集落跡である向ノ台貝塚が所在し、台地先端部と台地平坦部の住居跡群がセットになって一つの集落を形成していたと考えられる。貝類などは台地先端部に廃棄され、貝層が形成されていったのであろう。また、辺田遺跡からは焼けて割れた礫が多く出土しており、周辺に火をたいた集石遺構が存在していた可能性がある。さらに、石鏃や石鏃未製品・剥片類が出土しており、石器を製作していた可能性が高い。

### ２　弥生～古墳時代の調査成果

弥生時代中期～古墳時代前期の方形周溝墓群が検出されたことが特筆すべき成果である。辺田遺跡は縄文時代の包蔵地として周知されており、弥生時代の集落や墓の存在は推定されていなかったが、今後はその認識を改めなければならない。２・３・４号方形周溝墓の主軸はそろっているが、１号方形周溝墓の主軸は１基だけずれている。これは、弥生時代中～後期（２・３・４号）と古墳時代前期（１号）という方形周溝墓が作られた時期の違いと考えられる。一方、周溝の四隅は４基ともとぎれており、１号方形周溝墓は弥生時代中～後期の古い形態を残しているといえる。

### ３　弥生～古墳時代における遺跡群の関係

都町山王遺跡（旧兼坂遺跡）－４では、1972 年に（財）千葉県都市公社により発掘調査が行われ、古墳時代前～中期の方形周溝墓１基が検出されているが、遺物の出土状況から時期決定に確実性を欠いている。また、1989・1990・1991 年の３回にわたって（財）千葉市文化財調査協会により確認調査が行われ、古墳時代前期の方形周溝墓２基が検出されているが、新しい時期の所産である可能性が高い。和田前西遺跡（旧和田前遺跡）－９では、1980 年に和田前遺跡調査会により発掘調査が行われ、古墳時代前期の方形周溝墓６基が検出されているが、報告書が刊行されていないため詳細は不明である。聖人塚遺跡（兼坂東遺跡）－ 17 では、1994 年に（財）千葉市文化財調査協会により確認調査が行われ、古墳時代の土師器片とともに時期不明の溝４条が検出されており、方形周溝墓である可能性が考えられる。田向南遺跡－ 21 では、1979 ～ 80 年に田向南遺跡調査会により発掘調査が行われ、古墳時代前期の溝が３条検出されており、方形周溝墓の可能性が高いという所見が得られている。井合遺跡－ 23 では、1991 年に（財）千葉市文化財調査協会により確認調査が行われ、時期不明の方形周溝墓１基が検出されている。星久喜遺跡－ 24 では、1972 年に（財）千葉県都市公社、1979 年に千葉市教育委員会により発掘調査が行われ、弥生時代中期後半の方形周溝墓９基、弥生時代後期末～古墳時代初頭の方形周溝墓２基（現在の認識では方墳）が検出されている。

このように、辺田遺跡周辺の都川下流域で確実に方形周溝墓だといえるものは、星久喜遺跡の事例しかなく、その他の事例は、時期不明の方形周溝墓や形状不明の溝など、確実でないものや詳細が不明なものばかりである。こうした中で、今回、辺田遺跡で検出された弥生時代中期～古墳時代前期の方形周溝墓群は貴重な調査成果といえる。



48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:20　　08.4.1　10:24:44 AM

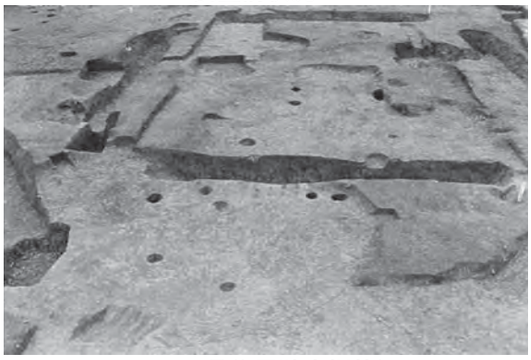
# 写　真　図　版

48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:21　　08.4.1　10:24:44 AM

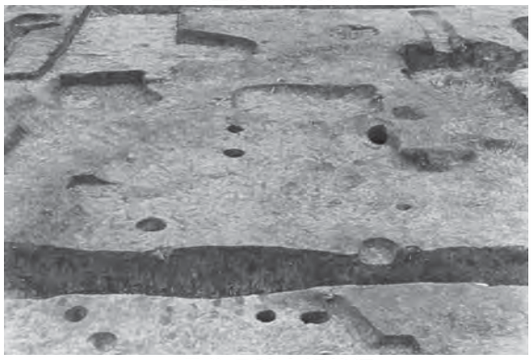
調査前状況１

調査前状況２

１号住居跡完掘状況

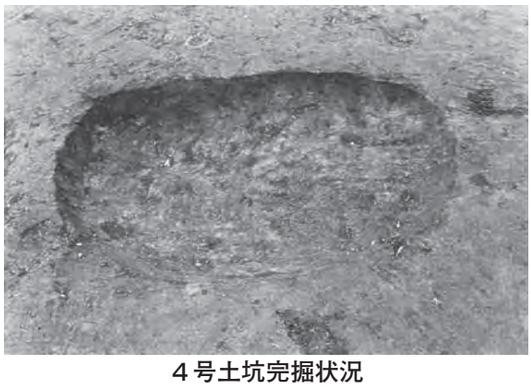


２・３号住居跡完掘状況

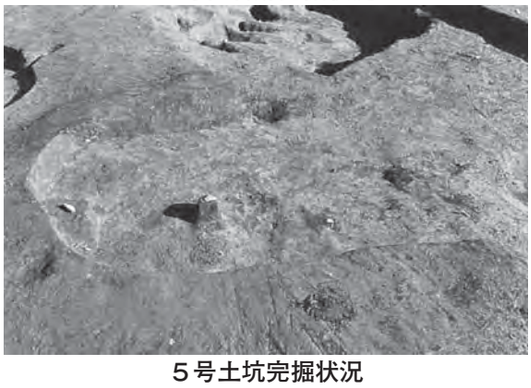


２号住居跡完掘状況

３号住居跡完掘状況

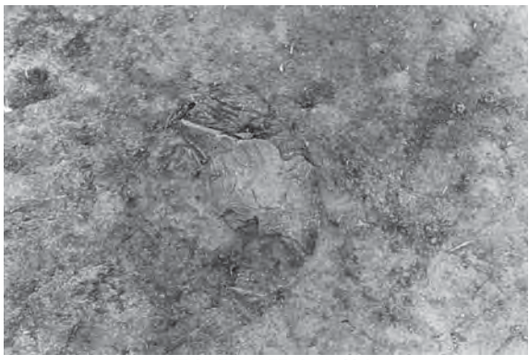


４号土坑完掘状況



５号土坑完掘状況

１号埋設土器出土状況


２号埋設土器出土状況

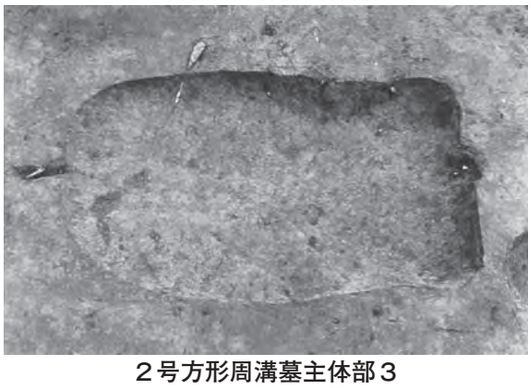
１号方形周溝墓完掘状況

２号方形周溝墓完掘状況１

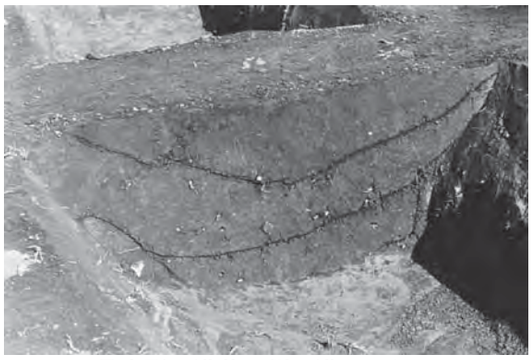
２号方形周溝墓完掘状況２

２号方形周溝墓主体部１

２号方形周溝墓主体部２


２号方形周溝墓主体部３

48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:23　　08.4.1　10:24:46 AM

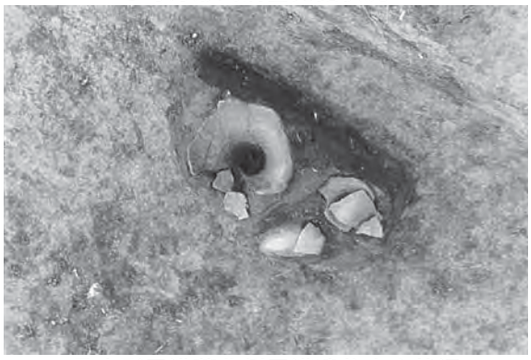

２号方形周溝墓西側周溝セクション

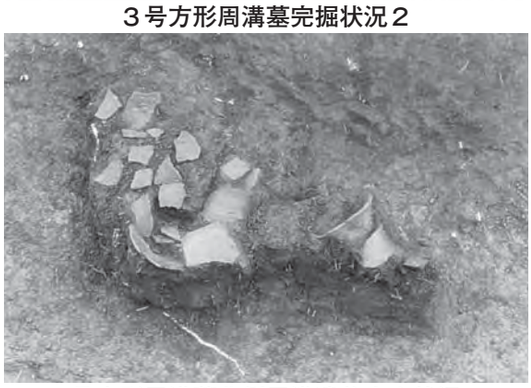
２号方形周溝墓南側周溝セクション

３号方形周溝墓検出状況

３号方形周溝墓完掘状況１

３号方形周溝墓完掘状況２


３号方形周溝墓北側周溝遺物出土状況１


３号方形周溝墓北側周溝遺物出土状況２

３号方形周溝墓北側周溝遺物出土状況３

４号方形周溝墓完掘状況１

４号方形周溝墓完掘状況２

４号方形周溝墓完掘状況３

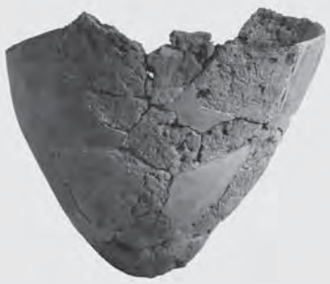
主体部覆土選別作業

完掘状況北側

完掘状況南側

作業風景１

作業風景２



第8図ー20

第8図ー21

第9図ー21

第9図ー22

第9図ー23

第15図ー1

第15図ー2

第15図ー9

第15図ー8

**辺田遺跡出土遺物**

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | ちばし　へたいせき |
| 書　　名 | 千葉市　辺田遺跡 |
| 副　書　名 | 平成19年度 |
| 巻　　次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 古谷　渉 |
| 編集機関 | 財団法人　千葉市教育振興財団　埋蔵文化財調査センター |
| 所　在　地 | 〒260－0814　千葉市中央区南生実町1210　TEL　043-266-5433 |
| 発行年月日 | 2008年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | 所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>（旧測地系） | 東経<br>（旧測地系） | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 辺田（へた）遺跡 | 中央区<br>都町1134-3<br>の一部 | 12104 | 中央区<br>－142 | ３５°<br>３６′<br>２５″ | １４０°<br>８′<br>５５″ | 20071101<br>～<br>20071130 | 570㎡ | 宅地造成 |

| 所収遺跡名 | 種　　別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 辺田遺跡 | 集落<br>墓 | 縄文時代早期<br><br>後期<br>晩期<br>弥生時代<br>中～後期<br>古墳時代前期<br>平安時代 | 竪穴住居跡３軒<br>土坑１基　埋設土器１基<br>埋設土器１基<br><br>方形周溝墓３基<br><br>方形周溝墓１基<br>土坑１基 | 縄文土器・石鏃・石鏃未製品<br>剥片類<br>縄文土器<br>縄文土器<br>弥生土器<br><br>土師器<br>土師器 | 縄文時代早期後半の集落跡と弥生時代中期～古墳時代前期の方形周溝墓群が検出された |

| | |
|---|---|
| 要　　約 | 縄文時代早期後半（条痕文期）の集落跡が検出されたことが特筆すべき成果である。同一台地上の先端部には同時期の地点貝塚を伴う集落跡である向ノ台貝塚が所在し、台地先端部と台地平坦部の住居跡群がセットになって一つの集落を形成していたと考えられる。貝類などは台地先端部に廃棄され、貝層が形成されていったのであろう。また、辺田遺跡からは焼けて割れた礫が多く出土しており、周辺に火をたいた集石遺構が存在していた可能性がある。さらに、石鏃や石鏃未製品・剥片類が出土しており、石器を製作していた可能性が高い。<br>弥生時代中期～古墳時代前期の方形周溝墓群が検出されたことが特筆すべき成果である。辺田遺跡は縄文時代の包蔵地として周知されており、弥生時代の集落や墓の存在は推定されていなかったが、今後はその認識を改めなければならない。２・３・４号方形周溝墓の主軸はそろっているが、１号方形周溝墓の主軸は１基だけずれている。これは、弥生時代中～後期（２・３・４号）と古墳時代前期（１号）という方形周溝墓が作られた時期の違いと考えられる。一方、周溝の四隅は４基ともとぎれており、１号方形周溝墓は弥生時代中～後期の古い形態を残しているといえる。<br>辺田遺跡周辺の都川下流域で確実に方形周溝墓だといえるものは、星久喜遺跡の事例しかなく、その他の事例は、時期不明の方形周溝墓や形状不明の溝など、確実でないものや詳細が不明なものばかりである。こうした中で、今回、辺田遺跡で検出された弥生時代中期～古墳時代前期の方形周溝墓群は貴重な調査成果といえる。 |

48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:27　　08.4.1　10:24:51 AM

千葉市辺田遺跡
— 平成19年度 —
平成20年３月31日発行

編集・発行　株式会社 細田工務店
財団法人 千葉市教育振興財団
埋蔵文化財調査センター
〒260-0814
千葉市中央区南生実町1210
ＴＥＬ 043-266-5433

印　　刷　株式会社　弘　文　社
〒 272-0033
市川市市川南 2-7-2
ＴＥＬ 047-324-5977

48018千葉市辺田遺跡H19.indd　Sec1:28　　08.4.1　10:24:51 AM